

第10回建築コンクール

醸しだす建築

シンポジウム／受賞作品

公益社団法人
愛知建築士会 名古屋北支部

製作・発行

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部

<https://www.asa758kita.jp/> <http://kenchiku-concours-758n.org/>

第10回建築コンクール「醸しだす建築」 2020年1月発行 300円(税込)

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部主催



INDEX

シンポジウム

シンポジウムパネラー／審査員	04
シンポジウムはじめのあいさつ	05
伊礼智	05
江尻憲泰	07

栗生明	10
中村好文	12
古谷誠章	17
シンポジウムをふりかえって	22

コンクール

最優秀賞	23
優秀賞	24
審査員賞	25
佳作	26

あとがき	27
後援／協賛企業	27

第10回 建築コンクール シンポジウム

シンポジウムパネラー／審査員 ※登壇順



伊礼智 建築家

琉球大学工学部卒業。東京藝術大学美術学部建築科大学院修了。丸谷博男+エーアンドエーを経て、1996年伊礼智設計室設立。2004年『東京町家』を東京の工務店3社と展開。2006年『9坪の家』、2007年『町角の家』でエコビルド賞受賞。著書に『伊礼智の住宅設計作法』（新建新聞社、アース工房）、『伊礼智の住宅設計』（エクスマレッジ）などがある。



江尻憲泰 構造家

千葉大学大学院工学研究科修士課程修了。1988年有限会社青木繁研究室。1996年有限会社江尻建築構造設計事務所設立。2010年日本構造デザイン賞受賞。2013年第14回日本免震構造協会作品賞受賞。長岡造形大学教授。



栗生明 建築家

早稲田大学大学院工学部研究科修士課程修了。1973年(株)楨総合計画事務所。1979年(株)都市建築設計事務所Kアトリエ設立。1987年(株)栗生総合計画事務所。1996年日本建築学会賞作品賞受賞。1999年ケネス・F・ブラウン・アジア太平洋建築デザイン賞受賞。2002年第43回建築業協会賞(BCS賞)受賞。2003年日本芸術院賞受賞。2005年第8回アルカシア建築賞ゴールドメダル受賞。2010年第12回公共建築賞受賞。



中村好文 建築家

武蔵野美術大学建築学科卒業。1972年穴道建築設計事務所。1975年東京都立品川職業訓練校木工科。1976年吉村順三設計事務所。1981年レミングハウス設立。1987年第1回吉岡賞受賞。1993年第18回吉田五十八賞特別賞受賞。日本大学生産工学部建築工学科教授。著書に『住宅巡礼』（新潮社）、『普段着の住宅術』（王国社）、『住宅読本』（新潮社）などがある。



古谷誠章 建築家

早稲田大学大学院博士前期課程修了。1994年八木佐千子と共同してNASCA設立。2001年有限会社ナスカー級建築士事務所。1991年第8回吉岡賞受賞。1999年日本建築家協会新人賞受賞。2007年日本建築学会賞作品賞受賞。2007年日本建築家協会賞受賞。2011年日本芸術院賞受賞。早稲田大学教授。著書に『shuffled-古谷誠章の建築ノート』（TOTO出版）、『がらんどう』（王国社）、『マドの思想』（彰国社）、『建築家っておもしろい』（文屋）などがある。

シンポジウムはじめのあいさつ

古谷 皆さんこんにちは！

審査員長ってわけじゃないですけども、なんていうか狂言回しじゃないですけども、そういう役割を仰せつかっております古谷です。なので全然権限も何もないから、大概圧倒されたり、無視されたりする場合もあるんですけど、一応、進行を務めさせていただきたいと思います。

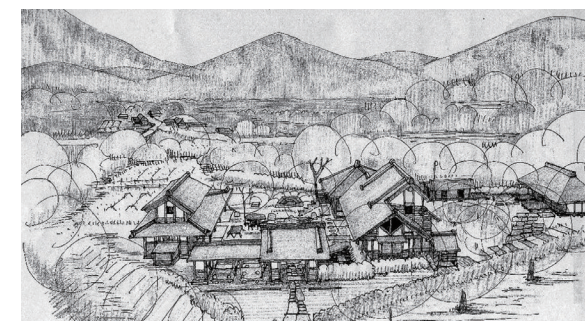
5枚のスライドで何かしゃべるっていうのは、もともとこのコンクールは何だかよくわからないタイトルが多いので、審査員がどのように考えているのかっていうのを、事前にちょっとお知らせするシンポジウムをやったりしていたのが始まりですね。一応5枚のスライドを使うっていうことなんですけど、これも往々にして枠を踏み出す場合が多いので…。今日はどうか分かりませんが、一人5枚の制限の中でそれぞれの考える「醸し出す建築」について少し解説をしていただくという趣向です。そうなっているかもわかりませんが…。



パネラー01 | 伊礼智 建築家

みなさんこんにちは伊礼です。毎回難しいんですが、今回のテーマはほんとに難しい。以前「時間の建築」というテーマがあったんですけど、今回選んだものはそれと被っているような気がします。5枚のスライドは、いつもは違ったものを5枚用意するんですが、今日はひとつだけに絞りました。今年のはじめにシンポジウムを一緒にやった方で、それからお付き合いがありまして、ご存じの方もいると思いますけれども、ちょっと不思議な人の自宅を見ていただきます。

岩崎駿介という方で、もう80歳を超えているんですけども、その人の自宅です。茨城の山の上に自宅を構えていて、これが最終の完成図ですね。彼が描いたスケッチで『落日荘』といいます。20年近く、ご夫婦2人でセルフビルドしてらるんです。ここで、岩崎さんのご紹介をちょっとしますと、芸大を出て、ハーバードで大学院へ行きます。それから日本に戻ってきて横浜市役所に勤務して市の都市計画に携わります。横浜市の街をつくったのは彼なんですね。バリバリの都市計画家だったんですけども、そこを辞めまして、そのあと夫婦で世界を転々とするんですね。そして、あちこちの国でいろんな指導をして、また日本に戻ってきて60歳の半ば過ぎから自宅をセルフビルドし始め、現在ここまで（次項右上）できています。80歳を過ぎた今もコツコツ作り続けていて、この間も石を見に行き、自分たちで石を敷いてる姿をウェブにアップしていました。2人でこんなに何のためにつくってるのかわからないんですけども、とにかく毎日タタつくってるんですね。それで今、会議棟のようなものをつくってるんですけども、そこでセミナーをやって、景色のいいバルコニーに出て宴会をやる。そういう生活をされています。



徐々に生成され、変化し、現れてくる建築 落日荘

次のスライドは、上からドローンで撮影したものです。
今、ここまでできています。ここが自宅で、これが門ですね。そして、これが会議棟というか説教所といった感じのところですね。岩崎さんは声も大きいし、世界のこと、政治のこと、建築のこと、いろんなことを語るの、宗教家のように思えてしまうがなくて、最初はできるだけ近づかないようにしてんですけど、だんだんと面白い方だなあと思うようになりました。奥さんも芸大の出身で、とっても手先が器用なので、奥さんの方が大工さんのような役割をされているようです。



ひたすら作り続ける



世界を思う

次のスライドはリビングから見たところです。
山々を眺めながら、この軸線上にどうい都市があって、どうい世界につながっているのか、常にここから世界を考えているという感じなんです。日本のど田舎に居るんですけども、そこの暮らしだけで終わらせるんじゃなくて、むしろ逆に世界中に思いを馳せていて、そのことが魅力的で不思議な感じがします。

次のスライドです。これは完成間際の会議棟（写真左）ですね。ほとんどお寺にしか見えないんですよ。アジアのどこかのホテルをベースにしてほしいんですけども、宗教建築のような感じがします。これが完成していて、訪ねてきた方々を相手に、建築の話や世界の話、都市の話とかいろいろ語ってらっしゃるんです。国内外からお客さんが来て、岩崎さんの話を聞いて、畑で獲れたものを天婦羅にして、ここで宴会をしています。



想いを伝える



自然とともに生きる



最後になります。『落日荘』は、自分の作風とまったく違うし、ああいうものはつくりたいとは思いますが、とても気になっていて、つくることか、暮らすこと、考えること、苦悩や欲びとか、迷いとかが熟成されて、芳醇な建築となって醸しだされている感じがするんですね。岩崎さんは、自分に一番欠けているものを持っている人かなと思っています。

今、日本の風景とか、日本らしい建築とかですね、そういうものがどんどん無くなっていることが、とても気になっています。もう一度、そういうことを考えながら、設計の残りの人生をやっていきいかなあと思わせてくれる方です。「醸しだされる建築」を考えたときに、強く思い浮かんできたのが、この『落日荘』でした。以上です。

パネラー02 | 江尻憲泰 構造家

ほかの審査員の先生方はすごい芸術的な作品ばかりを紹介されているんですけど、私は技術者でいつもベタなことばかり話をしています。今回の「醸しだす」は私にはハードルが高くて、なかなか思いつきませんでした。ちょっとズレたところの話になっちゃうかもしれないですけど、いちばん最初に醸し出すということを考えても全く何も思い浮かびませんでした。

それとちょっと似たような事で「燻す」ということを思いついたのでここに持ってきました。これはメキシコで5・6年、段階を追ってやっている鶏小屋の設計です。鶏小屋の網をチキンメッシュと言うんですけど、そのチキンメッシュに土をかぶせて、それを日干しにして造ろうとしたのですが（上段左、中写真）、それをやったらなかなか強度が上がらなくて崩れてしまいました。それでその次に考えたのが、上段右の写真です。今度はレンガ状にして中で燃やして焼いたらどうかと、焼いたんですけど、やっぱりうまく焼けてなくて崩れてしまいました。それで最後に焼杉で造ろうとしていたのですがメキシコでは手に入らなくて、合板（プライウッド）を焼いて、焼杉みたいなものを造り出すことができ、やっと鶏小屋が完成しました（左下の写真）。意匠は隈研吾さんなので、詳しくは私の方では説明できませんが、寝るところ食べるところ遊ぶところができています。外は外敵から守るために網が貼ってあります。ちょっと醸し出すと「燻す」はズレているかもしれませんが鶏の小屋が造り出されました。



燻す Casa Wabi

次は「醸す」に近づく気がしているんですが、熱海の崖の横っちょにカフェをつくりました。崖の横っちょなので、何にもないところなんです。ただ眺めだけはものすごく良い。そこにいろいろ試行錯誤しながら、木組でカフェを造り上げました。私もびっくりしたんですけども1年間位の間で何百万人という人がこの狭い、8m角位のちっちゃなカフェを訪れたというので建築の力ってすごいなあと。こんな何もなかったところに、そこにカフェを1つ建てたら人が集まってくる。場をつくり出すと醸し出すってちょっと似ているのかなということこの作品を紹介させていただきました。



KOEDA HOUSE

これちょっと変わっていて、木組みで、ずっと横に並べたものを組積して、周りに4本鉄骨の柱が建っているんですが、そこでピンで支持させた構造になっています。もしよかったら静岡の熱海にあるアカオローズガーデンの中にあるので訪れて見ていただくと、ここにしか売ってないスイーツもあるので。



これは逆にすごいベタで被っている作品のような気もするのですが「土壁」ですね。土壁って今は発酵させるようなことをやらない場合が多いですが、この建物は文化財で発酵させながら土壁をつくっています。昔の壁をバラバラと崩して、それを左下の写真ですけれど、ストックして土を寝かせておいてしばらくそのままにして、それをまた持ってきて土壁を塗るということをやっています。発酵させるのは、醸し出すということの典型なのではないでしょうか。現代ではほとんど土をそのまま塗っておしまいになってしまっているんですけど、発酵させることによって構造的にどういう効果があるかは、はっきり分からなくて、いっぱい調べているんですけど、非常に不思議です。ただ未だにやっているところもあります。あと左上の2枚については、私がちょっとびっくりしたんですけど、新潟の方に、土壁の工場があるんです。田んぼから土を持ってきて、それを切（すき）と練り混ぜながら土をつくって、それを寝かせるなり、そのまま使うなりしています。土壁の工場というのが非常に珍しくて、いろんなところに行っているんですけど、新潟に行ってみつけました。すごく珍しい例だったのでちょっと醸し出すとは関係ないんですけども2枚の写真を入れてあります。

話が元に戻りますが、土壁は非常に臭くなるんですが、塗って乾燥してしまうと全然臭わなくなります。昔の人は何でこういうことをやったのかなというのは私にとっては未だに疑問というか不思議なことなんですけれども、もしご存知の方がいれば教えて欲しいと思います。土壁とはもう10年20年近く付き合っているんですが、なんでそういうことをするかかわからないですね。ちなみに建築基準法上でも土壁は認められていて、そのつくり方にはこうやって寝かせるっていう作業は入っていないんですね。



これは醸し出すというか、お醤油さんですけど、もう10年以上かけてずっとお付き合いさせていただいています。私は構道家で、お施主さんと何かというのはなかなか無いんですが、このお施主さんとはすごく仲良くなって、ずっと長いことお付き合いさせていただいています。お醤油を作っているんですけど、10年前いちばん最初に行ったときには、非常に大きな木の工場なのでボロボロであちこち崩れてしまっていたんです。お醤油だと余計に菌が何かが入ってしまうようで木がボロボロになっていて、それでどうしようもなく、じゃあどうしようかっていうことを考えていました。耐震補強するお金もないけど、人を集めて内装ぐらいだったらできさうだということで、右上の写真ですけれど、竹を使って補強兼デザインをしました。完全にデザインだけの竹と、

構造として使ってボルトで留めてある竹の2種類があるのですが、そうやって補強しました。

そしたら熊本地震があって、その日に電話をして大丈夫ですかと言うと、かなり大変だった事でした。ただ、その時にこの竹の構造が効いてくれて、この醤油屋さんはボロボロにはなったんだけど崩れ落ちなくて、補強しておいてすごく良かったなと思いました。私は高速道路会社の人たちといろいろやっているんですが、熊本地震の調査でまわっている時にみなでお醤油屋さんに行ったらですね、大変な時なのに全員にお土産でお醤油をくれたという思い出があって、非常に嬉しかったです。今また補強を開始しています。それが右下の写真です。筋交いとかブレースを入れるところを、白い線で示してあります。ブレースを入れて見かけ上どうなるかということを試して、いろいろ補強を続けているところです。ちなみにこれ宣伝みたいになるんですが、浜田醤油さんという、今は香港の資本が入って、もともとの所有者の浜田さんは横に退いているんですけども、存続していて、今もずっと補強工事を行っています。もう計算するというよりは毎月1回とか2回とか行って、解体された様子を見ながら、ひとつずつ、ここは補強していった方がいい、ここはこう直しましょうとかやっていっています。非常に雰囲気のあるお醤油屋さんです。100年くらい建っています。

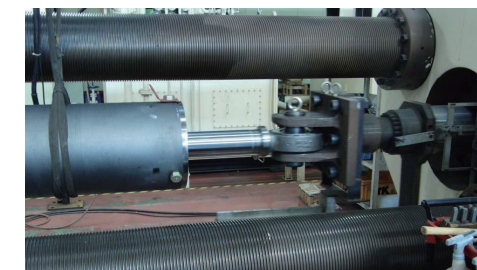


浜田醤油



それでは次に行きます。実は「物議をかもし出す」というので、免震ダンパーの話をしたかったんですが、ちょっとあまりにもベタすぎるのというのと、現状ちょっと当事者なのでやめました。

これはどちらかというと「物議を醸し出してほしい」という思いでここへ入れました。竹ってすごく優れた材料なんですけれども、なかなか日本の国の中では使えるような土壌ができていなくてですね、是非いろんなところで、議論が起きて使えるようになってくれば嬉しいなあという思いから、いちばん最後に入れていただきました。東南アジアなんかは、先ほどもちょっと話が出たのですけれども、竹を普通に使えるんですね。だけど日本だけはなぜか竹を使えなくて、それでいろんなところで竹を使ってチャレンジしています。





浜田醤油

淡路島 竹のカフェ

北海道 竹の家

佐渡 竹の集会場

左上の写真は先程のお醤油屋さんで、内装に使って、何とかこう構造材として、筋交いとしては非常に有効でした。この1本のところでここにボルトで止まっているところがあったりとか、そうじゃない内装材として使われているところがあります。構造とそうじゃない部分を合わせて筋交いの役割をさせたりしています。2枚目の写真は作っている最中の写真なんですが、淡路島で竹のカフェを作った時のものです。テーブルを置いて中で食べられるようにしています。3枚目は北海道で3階建ての竹の家を造ったものです。許可はもらえたんですけども、本当は普通に住めるといんですが、実験住宅としての許可なので、ヘルメットをかぶって上に上がらなければいけません。最後は佐渡で竹の集会所を造ったものです。200人ぐらい入れる集会場ができました。そういう実例を積み重ねています。私だけじゃなくて構造をやっている人で竹を使っているいろいろ発表されてるんですけども、なかなか建材にしようというような話とかは出てきません。なんとか竹がもうちょっとクローズアップされて見直されてもいいのかな「物議を醸し出してほしい」という思いで、このスライドを用意しました。

パネラー03 | 栗生明 建築家

これ分かる人います?中村さんや古谷さんなら分かるんじゃない?伝説の喫茶店。50代以上の人で会場の方、どなたか分かります?

新宿の『風月堂』なんです。これはね、開店前から開店後までこんな整然としている状態ではないんです。煙草の煙でももうとした中でクラシックが延々と流れている。1946年ですから戦後すぐですよ。オーナーが2000枚くらいのクラシックのレコードを持っていて、手前にあるのはLPレコードですけども、それで聞きながら、当時の若い文学者だとか芸術家がここにたむろしていました。ちょうど27年間くらいなんですよ、やった期間は。1973年に閉店しました。

最後はね、癩癩(フーテン)だとか、ヒッピーのたまり場になっちゃったんです。僕は学生時代にここに何度も行って、半日くらいは過ごしてたんです。ここは、例えば名前を挙げると、寺山修二だとか唐十郎だとか、アングラ演劇が当時盛んだった頃で、そういう人たちが舞台衣装のまま来ていた。あるいは岡本太郎だとか、この間、ビートたけしの本を読んでいたら、ビートたけしが一日ここに入り浸っていたという。僕とビートたけしは同年代なので、もしかしたらその当時出会っていたかなとも思うのだけれども。あるいは、五木寛之だとか野坂昭如とか、当時すでに名前が出ていましたけども、そういう文学者の卵も、たむろしていたんです。それから、ベ平連の拠点にもなっている。ちょうど1960年代の末から70年代の初めのころの全共闘の活動の一つの拠点みたいにもなったりして、ベトナム戦争の米兵を匿ったり。ちょっと反体制的な勢いというのが充満していたときです。ちょうど新宿の西口でフォーク集会有って、ゲリラフォーク、フォークゲリラかな、で機動隊が来て排除したっていう、そういう騒然とした時代の「気分」っていうものがここには充満していた。



これ設計したのはどなたか分かります?...増澤洵(ますざわまこと)さん。エレベーションがこうなんです。『風月堂』ちょうど新宿三越の裏通りに面しています。増澤さんは、ご存知の方はあるでしょうけども、『最小限住居』を設計した人です。その人の作品なんです。2層分がらんだ吹抜けになっていて、そこに煙草の煙が充満して、その足元で若い芸術家、あるいは芸術家の卵みたいな人たちが日夜議論している。ふらっと行っても隣の人が話しかけてくる。で、必ずその会話に参加する。もちろん黙って一日中本を読んでいる人もいましたけどもね。そういう「気分」。まあ、戦後社会の気分みたいなものを醸し出していた空間だなど。醸し出す空間というものをイメージした時に、僕はまずこれが思い浮かびました。1964年の東京オリンピックの時に海外にこの喫茶店が紹介されて、外国人のヒッピーがたくさん集まったというののひとつなんですよ。

これ分かります?宝塚のスターですけれども。去年退団した「朝夏まなと」。なんかこう、ある種の怪しげな感じが伝わってくる。醸し出されていると思いませんか?男装の麗人って言いますよね。宝塚は、スターシステムというのを持っていて、トップスターは男役、娘役のスターは、トップ娘役。そのカップルで5つの組が構成されているんです。その一つの代表で、これは『エリザベート』という演目のトートという死神の役なんですよ。男か女かわかんない。

歌舞伎っていうものは元々、出雲阿国(いずものおくに)が京都の北野天満宮で始めた『かぶき踊り』っていう、絶世の美女が男の格好をしていて、しかも、かぶき者の派手な格好をして踊るといものが大人気になって、将軍も江戸城にも招いた。だけど、そのうち禁止されるんですよ。女歌舞伎、遊女歌舞伎っていうのが風俗を乱すっていうので禁止されて、そのあと出てきたのが若衆歌舞伎っていう、これは今のジャニーズみたいなものです。これも風俗を乱すっていうので禁止されて、その後に野郎歌舞伎、男の歌舞伎、それが今に繋がって、男が今度は女役を演ずる。

こちらは女性が男役を演ずるっていう、ある種怪しげな雰囲気。男性のオーラを感じる。みんなそれを求めて観に行くだろうと思うんですけど。そういう伝統がだんだんと固まってきて、一時期宝塚も衰退したんですけど『ベルサイユのばら』で復活したんですよ。『ベルサイユのばら』っていうのは女性が男性の、オスカルという形で出てくる。あれがひとつのスタイル。『ベルサイユのばら』の前は何かというと、手塚治虫の『リボンの騎士』。これもサファイア姫が男になって活躍する。手塚治虫は宝塚に20年間住んでいたんです。で、宝塚のファンだった。宝塚にヒントを得て『リボンの騎士』を描いて、それに影響を受けて、『ベルサイユのばら』が描かれた。その『ベルサイユのばら』が宝塚の復興の大きなターニングポイントになっているんです。



これはスターシステムです。スターを如何にオーラを持たせて魅せるかということに集中しているんですね。階段は調べたら全部で26段ある。大階段っていうと宝塚の象徴みたいなものだけれど26段あって、下から16段目の所でスターが真ん中で演ずる。見栄を切る。そうするとみんなの目がそこに集中するんですよ。この階段実は踏面が23cmくらいしかない。蹴上が15.5cm。かなり急なんです。だから客席の方から見て壁のように見える。それで全員が見えるような仕掛けになって、こういう風になっている。脇役がサイドにいて、真ん中のスターが、ちょっと位置が違って、非常にオーラをもって観られる。これは23cmの踏面なのかと思うと、降りてくるとき怖いだろうと思うのだけれど、絶対足元を見ない。客の方を見ている。足元を見ると逆に怖いんですね。だから、体で覚える。ここで踊ったり歌ったりするわけですからすごいと思う。





これは最後のフィナーレですけれども、誰がスターかと思ったら、明らかにビジュアルでわかりますよね。真ん中にあんな大きな羽根を背負ってクジャクみたいになって出てくる。これは記号としても、これが中心なんだよということを、さっきの階段のように象徴しているわけですね。如何にスターを輝かせるかというこの演出をずっとやってきている。フィナーレは必ずこの大階段で上からみんな降りてくる。歌いながら降りてきて、16段目の所で止まって見栄を切ってまた降りてくる。そういうスタイルなんです。これに影響されたわけではないんですけど、僕は大階段の設計が多いんです。(笑)

(下の写真) さすがに23cmの踏面っていうのは足がはみ出すのでちょっと危ないので、これはもっとゆったりとした大階段です。佐世保のショッピングセンター『佐世保5番街』っていう名前です。階段の方に座って、手前で演者が演じる、あるいは演者が演じなくともその反対側が…

海なんです。海に向かっての大階段。ちょうどショッピングセンターの一番エンドにこの大階段を持ってきていて、向こう側に見える海を眺めて時間を過ごすというような場所です。もちろんここでは、階段を使って色んなイベントも、客寄せとして行われています。これも大階段が持っている場を演出する力みたいなものがあると思うんです。僕が設計した大階段では必ず結婚披露宴のパレードみたいなものも行われます。ここでも行われていますし、他の所でも階段でカップルが写真を撮っているのが必ず紹介されています。

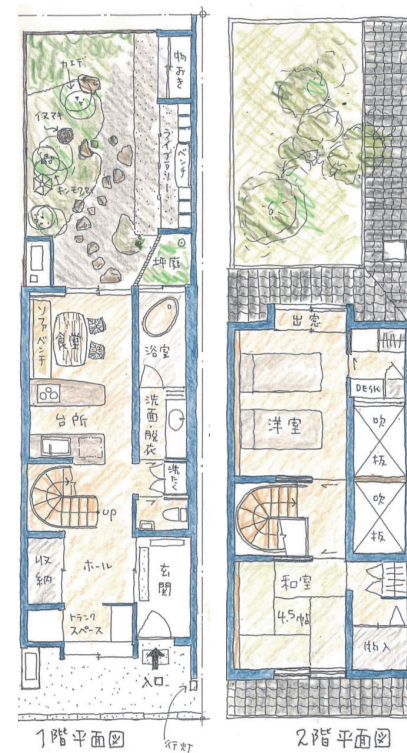


パネラー04 | 中村好文 建築家

毎年ね、5枚ということになってるんですけども。今年は思い切って違反してみようかと思って40枚持ってきました。時間は20分くらいで話そうと思っています。栗生さんと逆でごくごく現実的な僕のした仕事を2つ見てもらいます。



これは京都の町家を改修するプロジェクトです。京都の二条城の堀川の通りから何本目かに釜座っていう古い通りがあって、お釜をつくっていたところです。その中に民家があって、もともこの釜座の通りはずっといわゆる京都の町家が並んでいたところです。もう数件しか残ってないんです。そのうちの一つを宿泊施設に改修する仕事なんです。けれども、僕は宿泊施設というよりもむしろ住宅に改修してこの京都の町家に「暮らしているように泊る」というふうにしたくなって、そういうコンセプトなんです。京都の町家の気分っていうのをどんな形で現代に改修して醸し出すことができるか。



下の方が道路で、改修前は典型的な京町家のスタイルで通り土間がドンとあって、和室があって、座敷があってここが吹き抜けているんです。奥に軒とトイレがあってお風呂場は無いんですよ。だいたいあの辺は銭湯の文化が凄く盛んで、内風呂をもっている家は少なかったんです。これを左のように改修しました。ずっと通り庭だったところですけども、水回りをやっぱり中に入れなくて、ここにトイレと洗濯物干し場と洗面脱衣と浴室。小さな坪庭を入ったところあたりですね。玄関で、ホールがあって、U字型の階段があってキッチンがあって食堂。それで庭に面して、元はトイレだった場所ですけども、良さそうな場所だと思って、本を読む場所をつくろうと思いました。本棚を作って、本棚の中に入り込んで本が読めるような場所にしました。ライブラリーと呼んでいます。外物置もあります。庭もすごく荒れ果てて、ほとんど倒壊寸前の建物だったんですけども、全部京都風につくりかえました。

2階はこういうことで、すごい急な、ほぼハシゴと呼んでいいような階段で上がってきます。火袋と呼びますけれど吹抜けがあって、要するに台所の煙出しになってたわけですね。煮炊きをしたときこの火袋のところから抜ける。光もまたそこに、天窓で下りてくるというスタイル。これも基本的にはプランは変わっていないんです。上に四畳半の部屋と、洋室にしたベッドルーム。吹抜けは吹抜けで残し、小さな物置と机を作って泊り客がパソコンをしたりする場所にしました。

断面(下断面図)はこうで、右側が道路で玄関ですね。上の部屋は畳の部屋で四畳半ですけど、そうですねこのへんは高さ1300くらいですかね。それでここはドンと吹き抜けていて、下に、ちょっとしたスタディになっています。これは水回りのところを切っています。吹抜けのところ。そしてここに洗濯場があってトイレがあって洗面脱衣があって、バスルームがあって、小さな坪庭、浴室へと続いています。この吹き抜けは、そのままだと空間がドンと大きすぎるのでいっぺんここで格子状のスクリーン的なものをいれて高さを調節しています(次項中央下写真)。

左下の写真が庭と食堂とキッチンの関係ですね。ここは宿泊施設ですけどもできれば一泊ではなく一週間くらい長期滞在をして、例えば錦小路地から食材を買ってきて自分で料理して食べるとか、そういう楽しみをしてもらいたいと思って、完璧なキッチンと食器もいろんなものもそろえて備えてあります。



庭も相当荒れていたんですけども、ここに素晴らしいマキの木があってこれをなんとか活かそうということで、ほぼこのマキの木だけ残して作り変えました。灯籠も古い灯籠を買って入れ替えました。戸をあけるとここに座れて、2人の人が座って読書ができるようにしました。幅さん（幅允孝）という本を選ぶ専門家がいる、その人が300冊くらいの本を持ってきて、京都に関する本をここに選んでいます。ここに入り込んで本を読むのもよし、閉め切って、すだれの中に入っているような感じでなかなか落ち着いて本を読むこともできます。ちょうど座って目の前をみると坪庭があって奥行きを演出しました。逆方向に行くと飛び石でここが食堂、台所、そして道路方向にむかっています。



下の写真がメインの寝室になります。右の写真は浴室の坪庭ですね。それで洗面脱衣があって浴室があって坪庭があります。ここは欧米の方が多いので、木のお風呂に入れてあげようかなと思って、高野マキの卵型のお風呂をデザインして入れました。床は洗い出しです。京都の職人はすごくレベルが高く、大工さんにしろ、左官さんにしろ、できないことがないって感じなんです。例えばこういう床ってこのエッジがL型になると掃除がしにくいので、ズルとなんかないかな？って言ったらズルとなったんですね。そういうことをわりと普通にというか、それはできませんということじゃなくて、できると思います。といてとどんできてしまうところが面白くて京都で仕事するのは楽しいなと。まあ、いい職人っていうことですね。

これが火袋になったところで吹抜けです。そのままいくとちょっとスケールが合わなかったで中間に格子を入れた天井を作りました。天窓から入ってくる光が、ある時間にもすごく劇的な効果をもたらして、時間によってはホントに自分でも「おおっ」というような空間になっています。この梁はいい梁だったので、光の中に梁が1本とんでる様子を見たいなということでこういうことにしました。

主寝室ですね。この梁はオリジナル、もともとの梁でこの梁の上にLEDが仕込んであって調光できるんですけども、調光スイッチもついています。メインの照明はほとんどこれ1本です。



ちょうど松みたくに見えますけどこれが高野マキです。もう荒れ果てていたのを京都の植木屋さんが結構きれいな形に剪定してくれて、ちょうど額縁に入った松のように仕立ててくれました。見下ろすとこんな感じです。すごい小さい家なんです。20数坪しかないんですけども、意外と抜けがあるのと、プランがわりと自由になっているので、あんまり狭さというのを感じないでできたような気がします。この梁が面白くて、畳の部屋までずっと、同じ梁じゃないんですけども同じ位置で突き抜けていく様子が面白いなと思って残してみました。右下のパノラマ写真はちょうど階段室ですね。

奥は四畳半の畳の部屋ですけども、よく旅館に泊まって畳の部屋に寝ると携帯とかメガネを置く場所がなくていやだないつも思う。踏んづけそうでいやだな。これは携帯を置く場所が造ってあってあります。

いまはこの外観で、『京の温所』という名前で一棟貸で借りることができます。



次はですね、僕は子供のときに千葉県九十九里浜に育っているんです。僕の家の前が松林で、松林を抜けると砂浜だったんです。60km続くすごい綺麗な砂浜で、僕は木登りが子供のころ本当に好きで、よく木に登っては海を眺めたり本を読んでいたりしたんです。その時の感じが本当によかったなっていう思いが残っていて「木の上で本を読んでいる感じ」を出したいなと、醸し出したいなと思ってつくったベンチです（次項左写真）。だからここに空中って入れたかったんですね。「空中ベンチ」です。これも改修です。吉村順三先生が55年くらい前に、長野県の御代田に建てた建物ですけども、これを友人が買って、僕が全面改修したわけです。

これが建物の1階。2階で一部に、屋根裏部屋があるんですね。屋根裏部屋は寝室だったわけです。この奥は物置になっていました。



これは改修後ですね。改修で割と大きかったのは、増築されていた部分を全部切り落としてオリジナルの形にしたことです。いわゆる減築をしたわけです。それでこの形になったんですね。それで屋根裏部屋の奥に、こういう物置があったんです。このクライアントというのはミナ・ペルホネンのファッションデザイナーの皆川明さんで、皆川さんと2人で工事中に、ほぼこの状態（前項左下写真）でここに上がったときに、このスペースですごくいいよね。このまま物置にしておくのはもったいないよねということになったんですね。

ぼくは大体そういうときには、本を読む場所が欲しい人間なので、じゃあまたこれを図書室にしましょう、と提案しました。ここね立てないくらいの低さなんです。その時に考えたのが、ここに椅子を持ち込むと頭をおさえられる感じの高さになるから居心地がよくないだろうと。だから床に座るしかないな、床に座っちゃう方がいいなと思ったんだけど、このまま床に座るとやっぱりなんか床にベタッと座る感じで、いやなんです。ただ、ここを1段あげてあげれば床に座ることに抵抗がないじゃないか。建築って割りとそういう心理学的なところがあるじゃないですか。で、僕はここを20cm上げて上がるようにしたんです。そうすれば床に座り込むのにそんなに抵抗がないだろうと思って。

ここで1段上がっているんですね。右上の写真は皆川さんが、この部屋のためにわざわざデザインしたカーペットです。ここは、このままいってズルズルと斜めに立ち上がって寄りかかる場所ができる。かつ、それがまたずっと頭の方へ巻き込んで。なぜそうしてあるかという、音が静かになります。ちょうどフードなんかを被った状態に。毛足のある絨毯なんで、本当に不思議なほど頭を出した状態とこっちへ付けた状態とで音が違うんです。それで本を読むのにいい環境になりゃしないかなということ。2人が並んで本を読むことができるようにしました。

それで前の写真にあったように、ここには窓が無かったんですけど、ここにやっぱり窓がほしいなということで窓を設けました（右上の写真）。で、窓を開けたらやっぱり外へ出たいなというふうになるんですね。それこそ心理的に。それでもこの高さなので、小さなベランダをつけると何か浮いちゃうので、それも嫌だなということもあって、全然違うものをしてみようということをしてきました。ただ出てもしようがないからズルズルと這い出すように出ている場所を作ろうと。

どういことを考えたかという、左の写真ですね。窓の外にベンチがあってそこにいきなり腰かけちゃう場所ができないかなってというアイデアです。それでどうしたらいいかなってのをいっぱいやって、結局最終はほぼこれになってるんです。ここに座って足をかけて、手前に書見台があってそれが体を支えて怖くないんじゃないか。書見台が結構高さがあるので怖くないということですね。で、もし僕がここにこうやって座って本を読みだしたら、きっとビールが飲みたくなるだろうと思って、真ん中の写真です。こういうものを作って、ここに引っ掛けると、ビールが飲めていいということです。

これを書見台のところに引っ掛けるとちょうど平行になるようになってそこにビールが乗せられる（下の写真）。

とっても眺めのいいところでしかも吉村先生の建物で、軒が、そうですね2m近く出ているので、ちょうど大きな傘の下に入っている感じで雨の降っているときでも外に出て濡れずに本が読める。それで佐久平が一望に見渡せ、奥に八ヶ岳連峰が見えるというとてもいい場所です。

こういう感じで、大の男が二人座ってもビクともしない作りになっています。本当に樹上、木の上に腰かけて本を読んでいる気分になれます。そして、この庇が大きく出ているので、包まれる感じで読書が楽しめる場所になりました。以上です。



パネラー05 | 古谷誠章 建築家

やっぱり「醸し出す」だからと思った時に、本当は、僕が得意なスカルパの話をしてはいけないよなって思ったんです。けれどもスカルパの話が僕がしてもあまり変わり映えがしないから、それは一応念頭に置いて、最近関わったプロジェクトを通して、その話をしてみたいと思います。

これは、4月に竣工した高知県宿毛市にある、『宿毛まちのえき林邸』という、もともと林さんの家なんですけど、130年経っている民家で、ももとの持ち主は「林有造」っていう、第一回帝国議会議員の政治家です。自由民権運動の。その林有造の家系というのは、その後三代にわたって国の大臣を生み出した、いわゆる政治家の家系で、吉田茂もこの家系です。吉田は養子に行ってるので名前が変わっています。あと、大隈重信と共に早稲田大学を設立した小野梓という建学の母と呼ばれる人ですが、30歳そこそこで亡くなるんで、後が続いていないんですが、この人も、この家系です。それから小松製作所を創始した竹内明太郎もこの家系です。このような名家なんです。



林有造がこれ建てたのは130年前でボロボロの状態でした。唐破風みたいなのは、半分落っこちちゃって、随所に雨漏りがしていて、相当老朽化した状態だったんです。それを座敷のようなものは復元的に改修して、住民の交流施設、もちろんイベントにも使っています。方や、台所とかは、思い切って新しく改造してカフェにしました。そういうカフェと24時間トイレのある、小さなまちのえきですね。それからお遍路さんのために屋外に自由に使えるシャワーがついている施設に変えたいということ宿毛市から依頼を受けました。宿毛市がなんで僕のところに来たかという。小野梓の出身の家と関係してるということで、早稲田に関係が深いということで、ぜひ早稲田の先生にと、総長のところに頼みに来られました。だけど、どうしても3月31日までにオープンしなきゃならないので時間がほとんどない。1年とちょっとしかない状態で。3月31日に完成しないと県の補助金が降りないので実現できない。もうこれを逃したら二度と古い130年の民家を生かすことができないと言われて、押し切られて、どうしてもやってもらいたい。おっかない仕事だったんですけど引き受けました。少なくとも早稲田の端くれだから、そういう意味では総長室に迷惑をかける訳にもいかなないので、事務所と学生と総動員して皆で取り組んだんです。結果として、今日ここでお話ししようとするのは、古くからあった130年前から仕込まれていたものと、それから新たに付け加えられたものがあるわけなんですけれども、それがかみ合うことで新しいだけでもない、古いだけでもないというものを作ることができるということです。これがさっきのスカルパの話にベースがつながっているんです。つまり130年間仕込まれていた材料を活用して、保存的でもあるんだけど充分活用して、新旧が渾然一体となったものを作ることです。

「これから先、醸し出されていくものに、130年前から続いてきたものが連動する」先程の好文さんの町屋もそうなんですけれども、木造は大変素晴らしいと、とにかく悪くなっているところだけ取り替えればいい。腐ったところだけ入れ替えることで、もう一度生き返らせることができるということです。小さな写真ですけど、ここにあるのが完全に吹き放しにできる縁側で、縁側から見た続き間の座敷の風景がこの状態です。こちらが吉田茂が花見をしたという2階の部屋（右上写真）です。こっちの方は、ちょっと新しくしたところで、構造は稲山正弘先生なんですけど、組子格子の耐震壁を入れて何とか耐震補強しました。一方右下の写真の方は、組子を入れちゃうと古いものに対して少し、賑やかになり過ぎてしまうので、強化ガラスの耐震壁を障子の後ろ、というか縁側に持っていきました。



1年とちょっとで調査から竣工まで行かなきゃいけないと、忙しくて大変だったんですが、その直後に、これも1年と1ヵ月で完成してほしいと。岐阜県美濃加茂市の旧伊深村役場です。これは自治会館として住民が使っていましたが、カフェに改造したいと言われて、ただでさえも宿毛で忙しかつたのにとおもうんですけど、これもなんとか滑り込みでやってもらいたいと言われて、頼まれてやりました。

これは100年は経ってないんですけど、伊深村時代に使われていた古い、可愛らしい木造の村役場があって、その隣に議会棟が木造で増築されていました。そこは撤去して本体の部分だけをカフェにしています。こちらのほうは登録有形文化財になっていたのどちらかと言うと文化財的にあまり大きく改変するところはなく、外観もそれから内観も基本的な骨格の部分は復元的に改修してあります。この執務室とか村長室とかは、この間まで貼ってあった天井が、実は随分と低いところに貼ってあった天井で、それを剥がしてみたら、それより大体60センチくらい上に本来の

天井があった痕跡があったので、全部天井の高さも昔の高さに戻して、復元的に作ってあります。ここに立っている門柱がありますが、これもとっくに無くなってたんですけど、古い写真をひっくり返していたら門柱が立っていましたので、門柱も復元してあります。その意味では、新旧渾然一体というところはさっきの宿毛とあんまり変わらないんです。



これは伊深の里なんですけれども、これが素晴らしくて、そこに正眼寺というお寺がありまして、今でも非常に重要なお寺なので、京都からも年に一遍皆さんここにお集まりになるといって、そういうお寺があります。このお寺の下にある里が上の写真ですが、目の前に田んぼがあって、この風情がとても、とても、すばらしいです。この里全体の雰囲気、それこそ醸し出しているものがある。

右上の写真が里の中の道です。この用水路は、この地域一帯の名士だった方が、自分の私財を使って、川から取水口を作って水を引き込んだ、そういう用水なんですね。しかもこの水は、田んぼの農業用水として引き込まれただけではなくて、小さな水力発電もしています。美濃太田は、このあたり一帯の町の中では、どこよりも早く電気がついていたという村でした。そういうものが育まれている感じがあって、その時の拠点になるようなものにしたないと、そういう気持ちが瞬間的に芽生えちゃったんで、もう忙しくて、ほんとにギブアップ寸前みたいな感じだったんです。けれども、これもお引き受けすることになりました。

まず最初にお話をしに行ったら、講演してほしいと言われて講演しに行ったら、先生、先にまずご飯を食べましょうと言って、とにかくご馳走してくださるんですね。先に食べないと話し合いもしてくれない。まず食べましょう。これ、伊深のご馳走っていうんですけど、地元のお母さん方が作ってくれた、地元の食材で手作りしたような、素朴な味でとてもおいしいご飯をまず食べて、その後



にワークショップをやったり講演会をやったりする。そういう里です。この里全体が人をもてなすというのが、自然にここに育まれているという、そういう所でもとても印象的です。つい先週、里巡りで歩きましょう、ということで、2時間ほど歩いて帰ってきたら、「かいもち」という、お米と里芋が混ざったご飯みたいなものをご馳走してくれて。これは先程の用水ですが、今も現役でこうやって皆さんが野菜洗ったりしている。という訳で、やはりここで循環している。稲作をして、ご飯を食べて、人をもてなして、そして皆さん自身もそれを楽しんでいる。ここに醸し出されているものを何とか続けていきたいなと思ったんです。ついでに言いますと、このカフェの運営を引き受けてくれた方は、岐阜あたりで活躍されている日本で最年少の幫間（ほうかん）の方で、辰次さんという方ですが、すごい人気です。太鼓持ちの方は、皆ご高齢なっちゃってるんだけど、辰次さんと兄弟子が、ひととき若い。そしてこの方達を作る、「舞妓さんちのかき氷」って言うのをここで出してるんですけど、この間5時間待ちだったらしいんです。ものすごい、大人気になっちゃってるんです。冬場はやってませんので、来年の夏までお待ち下さい。名古屋から皆さん食べに来るんです。

これまた不思議なものを頼まれてまして、今やってるんですけど、ウラジオストクにロシア革命の直前に建てられた建物があって、それをアパートメントスタイルのキッチンも付いているようなホテルに改装したい、という依頼が不思議なルートをたどりたどって僕のところにやって来ました。下の写真がその建物の中身で、高台で窓からはウラジオストクの港が見渡せるようなところなんです。とても雰囲気のある建物なんです。でも、竣工直後にロシア革命が起こったために極東国立工科大学の鉱山学部の校舎になって以来、ずっと100年近く使われていた。そしてそれが近年、極東国立工科大学が大きな島に集合移転して、新キャンパスに移転したために売り出された。そういう形になって、僕の施主がそれを買って取り戻したんです。ウラジオストクはずっと軍港で、文化的なことに関してどうしても後回しになっている。でも今は、ゲルギエフが肝入りのマリインスキー劇場をウラジオストクに作ったということで、文化的な物も何とかもう一度立て直していこうとしている。革命前のロシア構成主義の劇場などが残っているんですけど、新しいもの、特に宿が全くない。それなりの人が泊まるための宿がないということで、彼はどうしてもそれを解消したいと思いついたわけです。一室あたりかなりゆとりした部屋のホテルに改装中です。建物自体は復元的に当局の許可を得て、今、外装が完了したところです。すごいゆっくりなんですけど、これから内装に掛かるかなと。これも一種の改修なので、古い建物が醸し出しているものを受け継ぎながら、新しいものを加えていくという、言ってみれば同じことをここでもやっています。ロシアで仕事をするとは夢にも思いませんでした。



これは最近やることになったものを2つ、お目に掛けたいと思います。江尻先生が教えていらっしゃる長岡造形大学がある長岡で、長岡駅から1駅、宮内駅あたりの撰田屋地区という所です。撰田屋地区というのは、それこそ醸し出す文化、醸造文化の町で、吉乃川の酒造があったり、味噌屋さん、醤油屋さん、それぞれの蔵がある、醸造の里なんです。撰田屋という名前が面白いんですけど、元々宮内駅近くに大きなお宮があって、そこに参ってくる人達をもてなすような、そういう雰囲気があって、接待に通じていると言われているんです。その撰田屋地区の中に、機那サフラン酒という不思議な薬用酒の本舗があって、創始したのが「吉澤仁太郎」という人なんです。この方がサフラン酒で相当な財を成し、聞くとところによると、西の養命酒、東のサフラン酒と、養命酒と同じようなもので、薬用だったんです。こちらの長岡、新潟県あたりでは、子どもでも風邪引くとサフラン酒、なんか具合悪いとサフラン酒、というような感じで飲んでいたものなんですけど、薬事法の問題とかいろいろあって、その後サフラン酒は、薬事法上の薬酒の許可は取らずに、今はいわゆる一般キユール類として製造しているという、機那サフラン酒本舗というのがあります。



そして明治から大正、昭和の初めにかけて、次々と吉澤仁太郎が作った蔵があります。この仁太郎という人が非常に不思議なキャラクターの人で、下派手なんです。この鰻絵蔵は登録文化財なんですけど、凄い鰻絵の、結構はっきりしたビビッドな着色がされている鰻絵蔵があるんです。その鰻絵蔵を中心として、屋敷内にもいくつかある醸造蔵、調整蔵、道具蔵や米蔵、いろんなものがあって母屋があるんです。今は全体を市に移管して、それを市が寄贈を受ける形で、何か活用しようというプロポーザルを行いました。これらはもちろん保存的に改修する方法もあれば、新しく使いこなしていくものもあるでしょう。我々の提案は、それぞれの蔵に役割を持たせ、改修の仕方に少し強弱を付けていきたいと思いますというもので、もちろん蔵の活用ということもあるんですけど、同時に、その隙間の空間の方にも同じように醸されたものがあるので、建物そのものではなくて、建物と建物に囲まれてできているところを、それぞれの用途に使っていきましょうというものです。もちろん、仁太郎の庭もありますから、それも含めて活用していこうという提案をして、今まさに始まったところです。

A.建物(=図)の使い方について(案)
Diagram showing building usage proposals with sections: ひみつの教室 (Himitsu no Kyoushou), ライブラリーカフェ (Library Cafe), 新しい蔵れ (New Kura), 出張ラボ (Chakou Labo), テナントスペース (テナントスペース), 休憩場所/甘酒屋 (Rest Area/Sake Shop), 展示室 (Exhibition Room).

10 鰻絵と錦鯉と三尺玉に表される産業王代仁太郎の人物像を知る
11 地震被害の程度に応じて、復元的改修と創造的改修を組み合わせる
B.外部空間(=地)の使い方について(案)
Diagram showing external space usage proposals with sections: 大きな階段 (Large Stairs), 新しい施設も計画できる (New facilities can be planned), こどもの庭 (Children's Garden), 日本庭園 (Japanese Garden), 小さな階段 (Small Stairs).

最後、これはそれよりさらに新しくやることになったものです。佐賀県鹿島市というところで、元鍋島藩の土地柄ですね。今、人気急増中の鍋島という日本酒があります。あの日本酒の酒造メーカーのあるところ。そこで老朽化した市民会館を建て替えるというプロポーザルがありまして、つい最近これをやることになりました。小さな生涯学習施設と市役所との間に建っているんですけど、それを建て替える。僕の提案は、ここに立派なアーティストを呼んで、立派な劇場を作って、お客さんをよそから呼んでくるというタイプのホールにはむしろならないので、住民が、特に小・中学生がコンクールやったり、住民がいろいろなものの発表会やったり、そういう住民のためのホールを作ったらどうでしょう、ということを主眼に置いています。客席にいた人がステージに出て、演奏が終わったらまた客席に帰っていくというような、それがぐるぐる行われるためのホールということで、思い切って、舞台の袖がホワイトと繋がっているような、もちろん遮音はするんですけど、それを提案して、今これをやることになりました。



その土地に以前、浜宿という宿場町がありましたが、そこにもいっぱい酒蔵があるんです。ここも醸し出す、酒造、醸造文化なんだけど、浜宿の街道沿いに大変美しい左官と瓦の町並みが伝建地区に残っています。一軒一軒独立していて、これを保存していて、ついに伝建地区の指定を受けました。

一見関係ないように見えるんですけど、こういうところのデザイン、これを上手く引き継いでいこうなものを考えたいと思って、今やっています。

だいたい以上ですが、今までやってきたところは、いい酒蔵があったりするんだけど、醸造文化というか、人の文化が醸成しているところには、必ずお酒も醸成しているというか、お酒が醸成しているところに人の文化が醸成されるというか、もう切っても切れないものがある、そんな感じがします。

シンポジウムをふりかえって

古谷 個別のコメントは頂きましたが、最後にもう一度この「醸しだす建築」ということに対して総括的な、示唆を頂くようなコメントを頂きたいのですが、いかがでしょうか。

伊礼 醸しだす時、何を醸しだして、それがどういう効果があるかということが大事なかなと思っていて、僕は今日、岩崎さんの『落日荘』という、もうとてつもない、見たときに気が遠くなるようなものをご紹介したんですけども、醸しだされるものが、日本的なものとか地域の価値とか文化とか、そういうものがにじみ出ているとか、香り立つようなとか、うっすら漂っているみたいなのが、普通に見ると感じないけれども、よく見るとそういうものが見えてくるっていうのが、すごくおもしろいかなと思って期待をしています。

中村 僕は、あまり意識はしていなかったんですけど、僕が改修した町屋が120～130年経って、古谷さんがやったものより古い建物で、古い建物が持っている雰囲気というものが、何か醸しだすという言葉と割合近いところにあるような気がします。意識した訳じゃないんですけど、見ていたら、醸しだすというのが、古い建物の再利用っていうと変ですけども、そういうことって、意外と近いところにあったんだというのが、古谷さんのプレゼンを見て感じました。こじつけではなく、すごく近いところにあったんだという感想を持ちました。

江尻 醸しだすというのは、今日話を聞いていて、工学寄りにある私にとってハードルが高かったなと思います。何か雰囲気を作り出すとかいうようなことで、みなさんが良い方に作り出していて、私はちょうどタイムリーなものかもしれないけど、醸しだすって、いちばん真っ先に思い浮かんだのが、「物議を醸しだす」方だったので、私は印象が逆転しました。

栗生 古い建物だとか、古い環境というのは、自分で直接体験していなくても、時代を感じると、何かある種の面影みたいなものと繋がっていて、共感できるんですね。やっぱりそういうのは、空間として持っている、にじみ出てくるというのが我々に「ああ、これは大切にしなければいけない。受け継いでいかなきゃなんないな。」という風に思わせるんだと思うんです。片方で、人間に蓄積されたようなもの、先程の本を選ぶような人の話だとか、接待屋という話だとか、自分が持っているものを人に預けていく、伝えていく。それがその場を醸しだしていくひとつの要素ではないかなと思います。

古谷 最後の最後に話しましたが、人の文化が醸成されているところには必ずお酒が醸成されているというのが、冗談のようだけど、おもしろいことだなと思っています。

やっぱりお酒は一年一年、日本酒で言えば作っていくんですが、それが多くの場合、焼酎も含めて、何年か経って味が変わって来る。醸しだされるものの一番の代名詞のようなものがお酒なんですけれども、そういう非常に鋭敏な、変化しやすいようなものを、一生懸命作り出して、それを代々受け継いでいくというか、その手法は口伝のように、直接一緒に共同作業して出来ることで、自然と次の世代にも1年ずつ受け継がれていくという。お酒自身が醸されるのにも一定の時間がかかるんですけど、それが醸され続けるには、共同してやってきた仕事はずっと続いていかないとけない。醸し出されてという、一種のメカニズムを持っていたものです。それはお酒だけでなく、地域の文化とか、地域の生業だとか、地域の人、生活とかが結びついていて、最近よくコミュニティとか言いますが、そういったものが本当に豊かなものとして受け継がれていくためには、お酒の醸造をするのと同じようなプロセスを、そこに住まわれている方々がずっと続けていくと、それがいい形になって出来上がっていく、まさに「醸成」されるってことではないかなと思うんです。

建築はそこで何が出来るのかっていうところが、次の問題になるわけなんです。ひとつのヒントは、そこに前からあったものを簡単に壊して捨てちゃうんじゃなくて、何とか手を加えそれを繕いながら、「つくろう建築」っていうのもありましたけど、使い続けていく。その中で共有体験が繋がっていく、少しずつ歳の若い人と繋がっていくという、重なりがあれば、だんだん、それこそ折り重なっていくように受け継がれるということだと思います。これがまったくない街、1個もない場所っていうのは本当に魅力がない、寂しい感じになる。やむを得ずそういうことになることがあるのですが、それは津波のような非常に大きな自然災害を受けて、一掃されてしまったようなこともあるし、それから戦災でそういうことになることもある訳ですけど、そういう中でも何か痕跡みたいなものを引き継ぐことで、その先の醸しだされる過程、プロセスをもう一度立ち上げるのも良いのではないかと考えます。

何か付け加えることはありますか、みなさん。なければ一旦ここでシンポジウムは終了させていただきます。ありがとうございました。

第10回 建築コンクール 受賞作品



最優秀賞 「田の家」三宅 正浩 吉本 英正

街並にとけこむ素材と色“ブロック塀と赤い屋根”を用いて懐かしさと温かさを醸しだす。今ではネガティブにとらえられがちなブロック塀と赤い屋根を、街に溶け込む手がかりとしてデザインに取り入れて再構成することで意味を持ち周辺に影響を与えている。

優秀賞



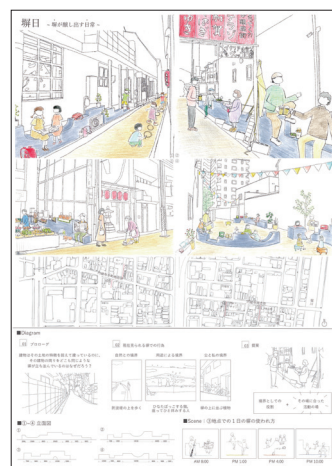
『土の出汁』
鈴木俊彦

土木の造成で取れた土のミネラル“出汁”を色の原料とする名塩和紙。その和紙を使うことで地域性のような物が醸しだされている。



『野間の改構』
ナノメートルアーキテクチャー／野中あつみ+三谷裕樹

建築も使い勝手も構えを改める「改構」という手法を使った海辺の別荘改修計画。物置小屋が遮っていた海への眺望を、フロストタイプのポリカーボネート波板により機能性と合わせ再獲得。映画の舞台になりそうな風景を作り上げている。



『塀日 ~塀が醸し出す日常~』
中村実希 宮原美佳

建物はその土地の特徴を捉えて建っているのにその周りは？普段何気なく見ている“塀”に境界としての役割だけでなく新たな役割を与え、道も含めた空間を活動の場とする仕掛けが面白い。

審査員賞



中村好文賞／古谷誠章賞『にっぽんアーカイブス』
加藤丈博

単なるドミトリーではなく日本的なものをストレートに留学生向けのシェアハウスとして提供している。表現の危うさはあるものの、日本的な気分、日本建築の持っている雰囲気をダイレクトに醸し出している点に好感が持てる。



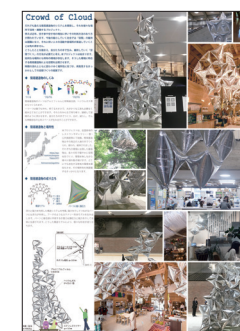
栗生明賞『1つの家の3つの小屋の3人の娘』
眞野サトル

3階建ての住宅の中を“敷地もしくは街”と見立て、小中高の3姉妹のための“小さな住居”を一人一人に用意した。敷地の余白は共用スペースとなり街を形成している。子供たちが大きくなって家族を連れて街に帰って来るとも想定している。



伊礼智賞『井戸水 薪焚き 桐の湯』
建築事務所 TESSEN／鴻池慎二 大木壮太

銭湯の看板。いいお湯なんだろうなーということが醸しだされている。あんな小さな看板で全体が生き生きしたものになっている。痛快な作品。



江尻憲泰賞『Crowd of Cloud』
浅見泰則 田村尚土

風船（アルミフィルム）・磁石・ヘリウムガス等それぞれの特性を活かし誰でも扱える簡易建造物を作り、様々な場所で活用展開する提案。アルミの風船は周囲を映し揺らぎ様々な情景を醸しだしている。

佳作



【HOUSE H -緑と戯れる家-】
福井啓介+森川啓介

四季折々、日々刻々様々に変化する植物の表情を、天井に設けた反射材を利用して建物内の空間に取り込んだ住宅。天井に映し出された光が緑を醸しだしている。



【宝性院観音堂】
柿木佑介+廣岡周平/
PRESIMMON HILLS architects

地域に開かれたお寺の観音堂。観音堂を地域に開くことで、官ではないもう一つのパブリック空間として地域に拠点を創出している。



【Terrasse納屋橋】
清水建設株式会社 佐々木喜啓、岡田達史、日比野加奈、長澤伶
光井純 アンド アソシエーツ 建築設計事務所 光井純、大津和久、安部絵理香、全勝、穴澤順子

街に埋没していた歴史的景観を取り込み一体的に整備された複合施設。車社会になりがちな名古屋の街並みの中で“暮らす都心”として賑わいを演出している。



【伊賀上野のオフィス】
森本雅史 森本景二

城下町に建つオフィス兼住宅。瓦屋根と桧の格子で構成される外観には内部の光が漏れだし城下町に新たな営みを醸しだしている。



【House NI -裏とオモテと境界-】
1-1 Architects 一級建築士事務所
神谷勇机+石川翔一

隠れていたダイナミックな架構の屋根裏空間をむき出しにし、さらに地域に対して開くことで街並みの一部となり古いものの価値を街に訴えかけている。

あとがき

今回のテーマは「醸しだす」でした。醸すには、雰囲気を生み出すとか、物事を作り出すといった意味があります。シンポジウムでは「醸しだす」を、時間をつかって受け継ぐメカニズムとしてとらえ、地域の文化や人といった痕跡を通して、たとえ無くなっても、伝えることが出来ると語っていただきました。手をかけ、時間をかけ、多くの人が共感し、受け継いで行くことで表れるコト。建築の作法として心がけていくことです。

さて、「建築コンクール」は今回で10回を迎えることが出来ました。建築の定義を広げようと、毎回、難しいお題をテーマに、建築家がスライドで語るシンポジウムと、応募された作品の公開審査では、建築の意味を整理し、建築の周囲にあるコトをとらえ、領域を広げる議論がなされました。それはまさに談論風発、実に楽しいものでした。

審査員も苦しむ難しいテーマのコンクールに、初回から参加いただいた、中村好文さん、古谷誠章さん、伊礼智さん、その後、加わって頂いた栗生明さんと江尻憲泰さん。今回が最後となりました。素晴らしいコメントの数々、お酒もすすむ、楽しいテーマ会議。多くのことを学びました。ここに感謝いたします。ありがとうございました。

最後にこの企画に賛同いただいた、協賛企業、後援団体のみなさまに御礼申し上げます。

次回、第11回は審査員も新たに、更に建築の定義を広げていきます。ご期待ください。

(公社)愛知建築士会名古屋北支部長
浅井裕雄

後援

愛知県、名古屋市、(株)中日新聞社、(公社)愛知建築士会、(公社)日本建築士会連合会、(公社)愛知建築士事務所協会、(公社)日本建築家協会東海支部愛知地域会、(株)中部経済新聞社、(公財)名古屋まちづくり公社名古屋都市センター

協賛企業



株式会社確認サービス、株式会社CI東海、ユダ木工株式会社、株式会社ワセ田ガス、株式会社ユニオン、株式会社加藤設計



26 | 受賞作品 佳作